

デンソー技術会会報 No.181

Sandpit

JOURNAL OF DENSO ENGINEERING SOCIETY

2011
8
August



生産技術部 第6生産システム室 岩井 綾子さんの油絵

技術ハイライト

PA64スタータの開発
～四輪車用世界最軽量への挑戦～



よくわかるシリーズ

物流トラックの隊列走行・
自動運転システム



海外あれこれ

NY・NJでの生活



情報ポケット

ネイルアートの魅力



街の発明家探訪

京和傘から拓く
新しい世界





京和傘から拓く新しい世界

探訪先:株式会社日吉屋 取材者:ボデー機器技術2部 第2技術室 加藤 達矢



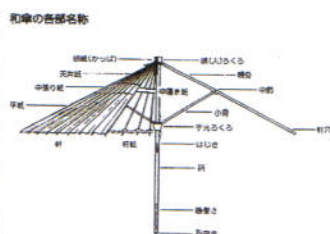
はじめに

近頃では特定のシーンを除いてほとんど見かけることのない和傘。京都で唯一残る「京和傘」の製造元が「伝統」+「モダン・デザイン」に根ざした商品開発をしていると知り、株式会社日吉屋(五代目当主西堀氏)を訪問した。

改めて、和傘とは

主な和傘の種類	
・番傘	普通は男性用として使われる傘
・蛇の目傘	ヘビの目のような輪の模様が描かれた傘
・羽二重傘	薄い和紙に正絹を重ねた生地の高級傘
・野点傘	野外で行う茶の湯の席で使う傘

【図1】主な和傘の種類



【図2】和傘の構造図

普通のビニール傘と比較して、和傘独自の発展由来ゆえに大きな違いがある【図1、2】。材料は和紙、竹など自然素材が中心。広がり部分の骨数は30~70本。広げればスッキリと末広がりになり真っ直ぐ、閉じればまるで一本の棒のように収まる。実はこれ、一本の竹を均等に縦割りにして割った通りの位置で組み立てているため。ほとんどの工程が手作りであり、「骨の数ほどある」といわれる工程数で、一張の製造に約2週間かかるという(和傘は「張(はり)」と数える)。

実物を目の前にすると、その圧倒的な存在感は一目瞭然。手に持つと、機械製造物にはない「手作り感」がひしひしと伝わってくる。ビニール傘より重みを感じるが、それが「差す」こと自体に意味を持たせてくれる印象だ。

伝統工芸からの新しい挑戦

ある日、西堀氏は和傘の天日干しの際に、改めて和紙を通過する太陽光の美しさに気付く。「この美しさを再現する照明をつくりたい(西堀氏)」。和傘の技術を織り込んだ、全く新しい照明器具への挑戦が始まった。



【図3】照明器具「古都里」

確かに和傘の普及率は低い。破れる? 重い? 着物しか似合わない? そういう側面はさておき、和傘の良い所は何かと考える。骨が美しい、畳める、光がきれい...「和傘では当たり前だが、照明器具にすることで新しい価値が生まれると思った(同氏)」。照明デザイナーと共に開発に取り組み、和傘の骨が開く構造技術を応用して円筒形に開閉できる独自構造をもった、美しい様式を取り込んだ画期的な照明器具「古都里(ことり)」の開発に成功した【図3】。「和傘の良さ、あえて小骨を通して

見える灯りにこだわった」と西堀氏。

続いて、動的な構造で傘の開き具合と明るさを調節できる照明器具「MOTO(イタリア語で“動”)」を開発【図4】。照明下部にあるリングの取っ手を上下することで傘の開度が調節可能となった。他にも、折り畳んで持ち運び可能な個室の開発など【図5】、斬新性と機能美を併せ持つ製品の開発で各方面から大きな注目を集め、今や12カ国の代理店と取引を持つに至っている。



【図4】動的構造を持つ「MOTO」



【図5】持ち運び可能な個室

伝統は革新の連続

西堀氏の持論であり、揺るぎない軸足となる考え方である。

常に新しいモノづくりを模索する。しかし、そのベースとなるのは長年かけて立脚されてきた京和傘づくりの魂、そして、日本的な美感・感性だ。様々な革新が連続することで伝統は形作られ、そして日本人ならではの「モノづくり」のこころを具現化することが最も重要なこと、と氏は熱く語る。

雨上がり間もない時分、取材を終え帰路に向かう道すがら和服姿の女性を数名見かけたが、皆さん普通のビニール傘。何だかとても勿体なく感じてしまった。



五代目当主 西堀氏



最大級規模の野点傘

最後に

可能性を止めないその姿勢、もっと色々な使い道がある、という西堀氏の目が遅く、頼もしく見えました。職人やデザイナーが個人レベルで頑張ることで日本のブランドイメージをより輝かせたいとの熱意、分野は違えど我々も一緒に頑張っていきたいと強く感じた取材でした。日吉屋HP <http://www.wagasa.com/>

日吉屋さんからキャンドルライトのプレゼントをいただきましたので、抽選で差し上げます。(詳しくは裏表紙)



似合ってますか?(筆者)